

21. 史料編纂所

- I 史料編纂所の研究目的と特徴 21－2
- II 「研究の水準」の分析・判定 21－6
 - 分析項目 I 研究活動の状況 21－6
 - 分析項目 II 研究成果の状況 21－29
- III 「質の向上度」の分析 21－34

I 史料編纂所の研究目的と特徴

【研究目的】 史料編纂所は、古代から明治維新までを対象に、史料の調査・収集、史料研究と編纂、研究成果の公開・普及を柱に日本史研究を進めることを目的とする我が国唯一の研究所である。2010年には共同利用・共同研究拠点(以下「拠点」)に認定され、日本史史料の研究資源化に関する研究拠点としての役割も担う。〔資料 21-1〕

資料 21-1 研究所・附属センターの設置目的

東京大学史料編纂所規則(第2条)

東京大学史料編纂所(以下「研究所」という。)は、日本に関する史料及びその編纂の研究、並びに研究成果による史料集出版を行うことを目的とする。

2 研究所は、学校教育法施行規則(昭和22年文部省令第11号)に定める共同利用、共同研究拠点(以下「拠点」という。)として、他大学の教員その他の者で拠点の目的たる研究に従事するものにその施設を利用させることができる。

東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター規則(第2条)

センターは、日本史に関する各種画像史料及び画像史料情報を収集・整理して系統的に蓄積するとともに、電子計算機等による画像情報処理を生かして解析・研究を行い、その成果を学内外に公開することを目的とする。

東京大学史料編纂所附属前近代日本史情報国際センター規則(第2条)

センターは、日本史史料に関する歴史情報論の研究を進め、史料データベースを知識ベース化することによって、史料の研究・編纂・出版の新しいシステムを作り出し、あわせて国際的な歴史情報互換を図ることを目的とする。

2 センターは、研究所の歴史情報処理用電子計算機システムを総括する。

【大学の目標との関連】 日本史分野において、史料に基づく「世界最高水準の研究」を行うことを目標とする。史料の調査・収集のため「大学や国境を超えた教育研究ネットワーク」拡充に努め、「自国の歴史や文化についての深い理解」を持ち、「高度な専門的知識と課題解決能力」を備えた人材を育成する基盤を提供するとともに、史料の研究資源化により「社会的ニーズ」に応える〔資料 21-2〕。

資料 21-2 東京大学の第2期中期目標期間の中期目標(抜粋)

(前文) 大学の基本的な目標

2. 東京大学の使命

(前略) 東京大学が育成を目指す人材は、自国の歴史や文化についての深い理解とともに、国際的な広い視野を有し、高度な専門的知識と課題解決能力を兼ね備え、強靱な開拓者精神を持ちつつ公共的な責任を自ら考えて行動する、タフな人材である。このような使命を遂行するため、東京大学は「開かれた大学」として、東京大学で学ぶにふさわしい資質・能力を有する国内外の全ての者に広く門戸を開くとともに、社会との幅広い連携を強化し、大学や国境を超えた教育研究ネットワークを拡充させることによって、より多様性に富む教育研究環境の実現を図る。

(中略)

2 研究に関する目標

(1) 研究水準及び研究の成果等に関する目標

① 総合研究大学として、人文学・社会科学から自然科学に至るまで 多様な分野で世界最高水準の研究を実施する。

(中略)

3 その他の目標

(1) 社会との連携や社会貢献に関する目標

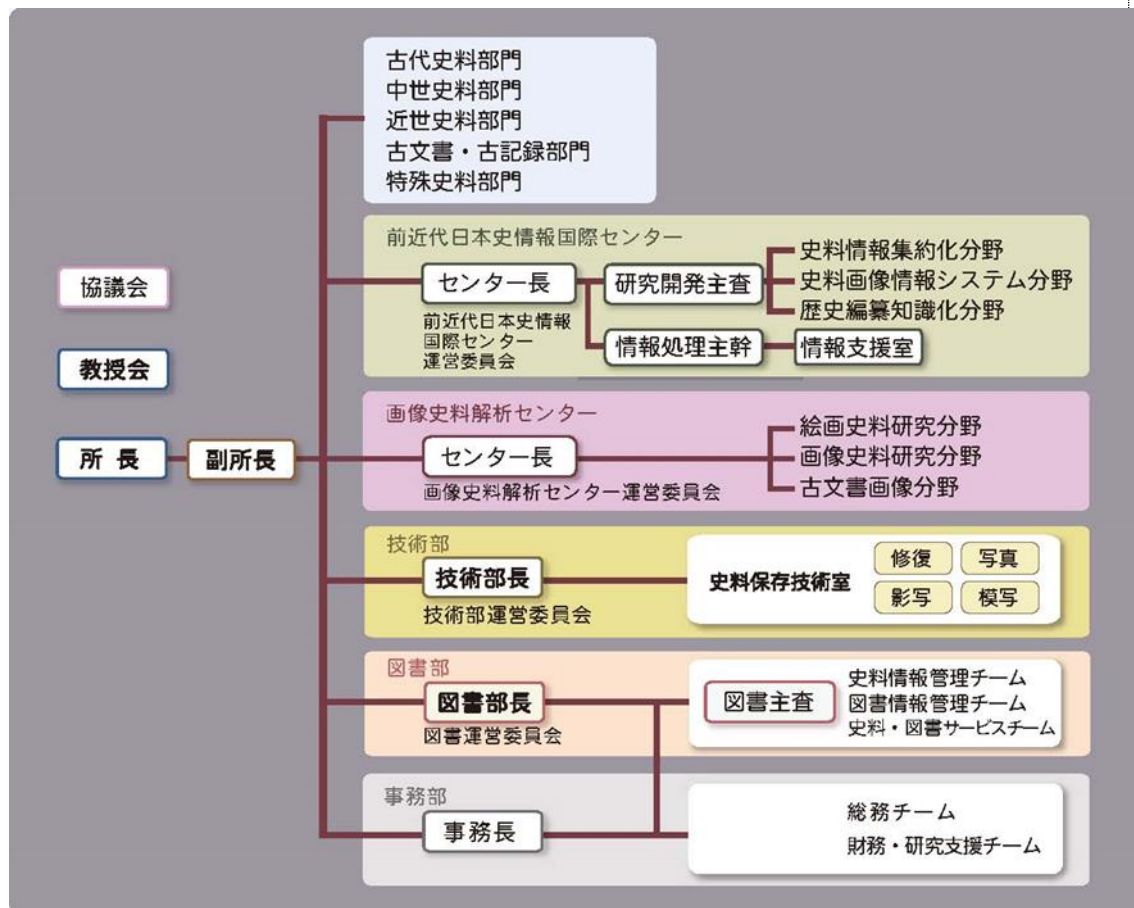
① 社会との連携を通じ、我が国の社会及び国際社会の持続的発展に 貢献する。

② 社会に開かれた大学として、大学の知に対する社会的ニーズに応えるとともに、その普及・浸透に貢献する。

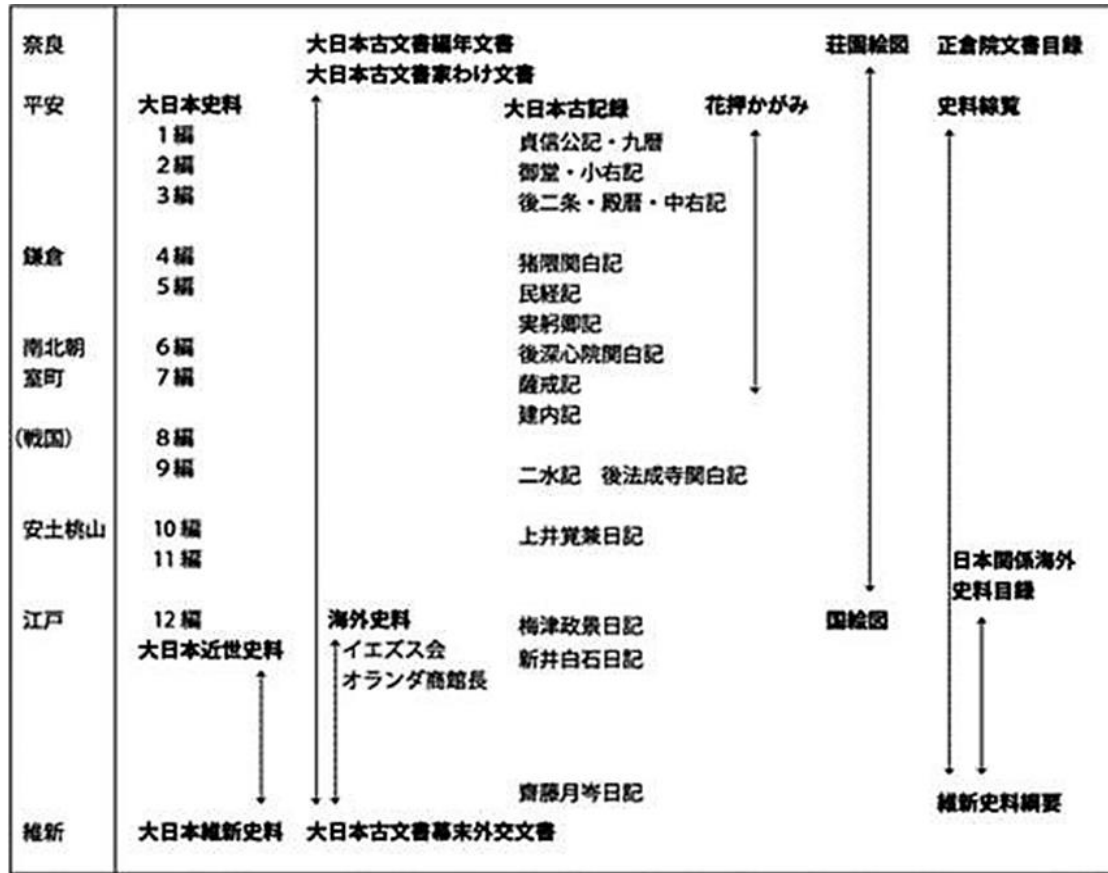
(後略)

【特徴1】 5つの大部門により、国内外に所在する日本関係史料の網羅的・系統的な調査・収集を行い、史料の様式・機能・形態・素材・伝来等の史料学的な分析と研究の蓄積の上に、日本史研究の基幹となる史料集を編纂・刊行し続けている。〔資料21-3、4〕

資料 21-3 史料編纂所の組織図



資料 21-4 史料編纂所が出版した主な基幹史料集



【特徴2】 二つのセンター〔資料 21-5〕を有し、日本史の新しい研究の対象・方法の開拓と研究資源の蓄積、公開を進めている。
 画像史料解析センターは、三つの分野を設けてプロジェクト研究を組織し、画像史料の系統的収集、解析、データベース(以下「DB」)等を通じた公開を進めている。
 前近代日本史情報国際センターは、情報学を専門とする専任教員を中心に、史料情報集約化、史料画像情報システム化、歴史編纂知識化の研究を行いつつ、日本史分野に特化した世界唯一の「史料編纂所歴史情報処理システム」(以下「SHIPS」)により良質な研究資源を学界・社会に提供している。

資料 21-5 二つのセンターの研究分野

画像史料解析センター	
絵画史料分野	肖像画・絵巻・屏風絵・荘園絵図・古地図などの絵画史料の研究
画像史料分野	錦絵・摺物(瓦版)・古写真など近世後期から近代初頭の画像史料の研究
古文書画像分野	花押・崩し字・金石文など古文書のデジタル画像を用いた研究

前近代日本史情報国際センター	
史料情報集約化分野	日本史史料に関するデータベースの構築および高度化の研究
史料画像情報システム化分野	日本史史料のデジタル画像を生成・蓄積・公開することにかかわる研究
歴史編纂知識化分野	日本史史料に関する各種データを学界・社会とよりよく共有するための研究

【特徴3】 日本史史料の研究資源化に関する研究拠点として、国内外の研究者との共同研究を行うと共に、所蔵史料の公開、史料画像や史料情報のDB公開等を通じ、共同利用を推進している。

【特徴4】 社会貢献に関する中期計画〔資料21-6〕に沿い、国宝・重要文化財を含む歴大な所蔵史料を保全・管理し、原本史料の精査を踏まえた史料情報の取得・研究を進展させている。〔後掲資料21-23(p.18)〕

資料21-6 社会貢献に関する中期計画（抜粋）

（資料-2 (p.2-3)の3 (1) ②を達成するための措置）

②-2 所蔵する学術的に貴重な物品（学術標本等）・図書・史料等を、良好な保全・管理状態に置くため修復・保全等の整備を計画的に進める。図書館・博物館等を通じた展示・紹介体制を整備し、教育機関をはじめ広く一般社会が東京大学の知に触れる機会を増進させる。（後略）
（第2期中期目標・中期計画一覧表より）

【特徴5】 研究活動を基礎に大学院・学部で教育を行い、研究員、RA、各種研究支援スタッフとして若手研究者を雇用し、育成している。外国人研究員を受け入れ、国際的な日本学研究に貢献している。公募による試験と公正な評価により男女共同参画を進め、常勤教員の女性比率は2割を超える。〔資料21-7〕

資料21-7 所属研究者の構成

	2010年度 (H22)	2011年度 (H23)	2012年度 (H24)	2013年度 (H25)	2014年度 (H26)	2015年度 (H27)
常勤教員(内女性)	60(14)	57(14)	55(13)	55(13)	55(13)	55(12)
特任研究員	8	7	6	8	8	7
学術研究支援員(RA)	11	10	11	5	7	7
学術振興会特別研究員	10	9	12	12	8	6
各種研究支援スタッフ	29	26	29	25	23	20
外国人研究員(内DC)	23(7)	17(6)	23(10)	21(10)	19(8)	13(6)

[想定する関係者とその期待]

①歴史学・日本史学の学界、②地方自治体や民間の博物館・文書館等、③海外の歴史学・アジア学・日本学等の研究機関・研究者が想定する関係者であり、歴史史料の研究資源化、史料に基づく研究の推進、基幹史料集の編纂刊行、歴史情報の発信、史料調査における連携、地方史編纂・文化財保護・社会教育等への協力が期待されている。さらに④日本史に関心を持つ市民からも、史料に基づく情報をわかりやすく伝えることが求められている。

II 「研究の水準」の分析・判定

分析項目 I 研究活動の状況

観点 研究活動の状況

(観点に係る状況)

1 国内外に所在する史料の調査・収集

史料に基づく研究と史料集の編纂のため、毎年 20 以上の都道府県で調査を行い、史料収集を継続している。2015 年度の例では、国内出張のべ日数 1,389 日、教員一人当たり 25.2 日、エフォート値 10.5%と高い水準を維持している〔資料 21-8〕。拠点の共同研究を機に地域研究者との連携が強まり、調査がより系統的組織的になったと判断される。

資料 21-8 出張日数と経費

2009 年度(常勤教員数 60 名)

	国内出張	海外出張	計
出張延べ日数	1389 日	280 日	1669 日
うち科学研究費助成事業による日数 (%)	912 日 (65.6%)	184 日 (65.7%)	1096 日 (65.6%)
うち共同研究費による日数 (%)	0	0	0
教員 1 人当たりの出張日数	23.15 日	4.66 日	27.81 日
総実働日数 (240 日) 比	9.64%	1.94%	11.58%

2015 年度(常勤教員数 55 名)

	国内出張	海外出張	計
出張延べ日数	1389 日	375 日	1764 日
うち科学研究費助成事業による日数 (%)	583 日 (42%)	154 日 (41.0%)	737 日 (41.7%)
うち共同研究費による日数 (%)	251 日 (18%)	9 日 (2.40%)	260 日 (14.7%)
教員 1 人当たりの出張日数	25.2 日	6.8 日	32.0 日
総実働日数 (240 日) 比	10.50%	2.83%	13.33%

長期在外研修・日帰り近距離出張は除く

2 デジタル媒体による歴史情報公開システムの研究開発

6 年間に①既所蔵のマイクロフィルム(以下「MF」)560 万コマのスキヤニングを完了し、②画像の撮影・管理・運用を一貫してコントロールするシステムの研究、③デジタル画像閲覧システム Hi-CAT Plus の開発等を行い、画像の統一的管理を実現し、同じ課題を持つ研究機関の関心を集めた。デジタル画像による史料収集は、36 万コマを超える〔資料 21-9〕。Hi-CAT Plus は、研究の成果を反映したメタデータを付して閲覧に供しており、デジタル画像による収集分についても 275,742 コマを搭載済みである〔資料 21-10〕。

資料 21-9 デジタル画像の蓄積（2010 年度本格開始）

	採訪		本所所蔵史料	
	件数	コマ数	件数	コマ数
2010(H. 22) 年度	18 件	16,628 コマ	0 件	0 コマ
2011(H. 23) 年度	37 件	34,936 コマ	4 件	126 コマ
2012(H. 24) 年度	239 件	74,296 コマ	144 件	109,218 コマ
2013(H. 25) 年度	194 件	79,098 コマ	195 件	104,717 コマ
2014(H. 26) 年度	320 件	50,014 コマ	104 件	119,470 コマ
2015(H. 27) 年度	268 件	110,190 コマ	122 件	29,770 コマ
計	1076 件	365,162 コマ	569 件	363,301 コマ

資料 21-10 採訪デジタル画像の Hi-CAT Plus への登録数

登録年度	年度件数	年度コマ数
2012 (H24)	23	34,974
2013 (H25)	429	162,864
2014 (H26)	242	39,103
2015 (H27)	136	38,801
計	830	275,742

3 史料研究と基幹的史料集の編纂

収集と研究をもとに、『大日本史料』『大日本古文書』等基幹史料集を 58 冊刊行した〔資料 21-11、別添資料 21-1〕。これらは、大学図書館等 300 館以上に収蔵され（例えば『大日本史料』第 12 編は 327 館、CiNii Books による）、日本史研究の基礎となっている。

資料 21-11 基幹史料集の出版（2010 年度～2015 年度）

	2010	2011	2012	2013	2014	2015
『大日本史料』	5 冊	3 冊	0 冊	4 冊	4 冊	2 冊
『大日本近世史料』	1 冊	1 冊	1 冊	1 冊	0 冊	2 冊
『大日本維新史料』	0 冊	1 冊	0 冊	1 冊	0 冊	1 冊
『大日本古文書』	2 冊	2 冊	3 冊	1 冊	1 冊	2 冊
『大日本古記録』	2 冊	3 冊	4 冊	1 冊	1 冊	2 冊
『日本関係海外史料』	2 冊	0 冊	1 冊	1 冊	1 冊	0 冊
『正倉院文書目録』	0 冊	0 冊	0 冊	0 冊	1 冊	0 冊
『日本荘園絵図聚影』	0 冊	0 冊	0 冊	0 冊	0 冊	1 冊
計	12 冊	10 冊	9 冊	9 冊	8 冊	10 冊

東京大学史料編纂所 分析項目 I

4 前近代日本史情報国際センターによる歴史情報の蓄積・公開・発信と歴史情報研究

上記1～3の成果を研究資源として提供するため、SHIPSの拡充に力を入れてきた。新DB 6件を公開し、データ件数は2015年度末までに合計1,409,755件増加〔資料21-12〕、DBへのアクセス数も増加しており、研究活動と情報発信が活発に行われていることを示している〔資料21-13〕。

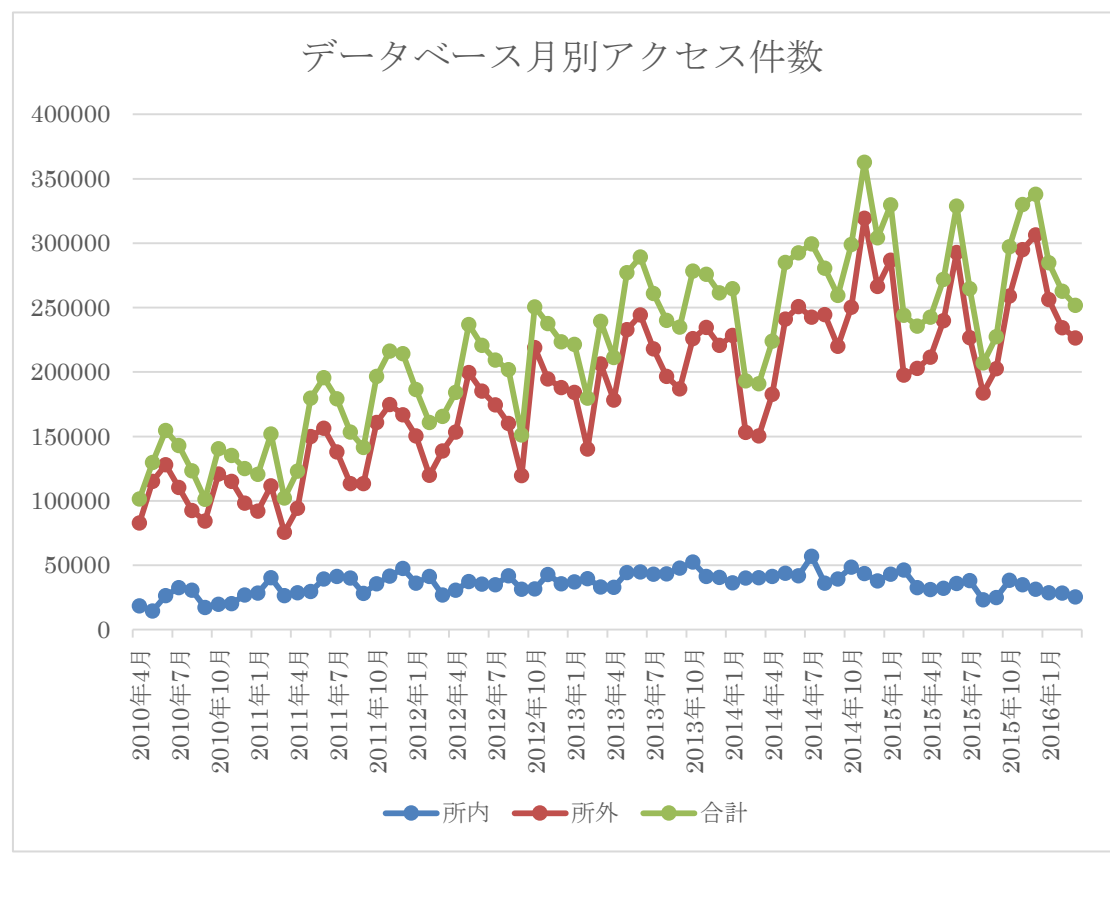
資料21-12 歴史情報データベース(テキスト系・画像系)とデータ数の伸び

	データベース名称	2009年度末	2015年度末	増減	備考
1	所蔵史料目録	367,288	446,590	79,302	
2	維新史料綱要	45,466	45,620	154	
3	中世記録人名索引	190,228	341,377	151,149	
4	花押カード	29,771	29,772	1	☆★
5	編年史料カード	64,151	122,998	58,847	
6	大日本史料索引	1,442,030	1,649,833	207,803	
7	奈良時代古文書フルテキスト	12,900	12,901	1	
8	平安遺文フルテキスト	13,828	13,907	79	
9	古文書フルテキスト	51,724	65,588	13,864	
10	鎌倉遺文フルテキスト	33,938	36,303	2,365	
11	摺物	8,992	8,992	0	☆
12	古写真	1,967	2,054	87	☆★
13	肖像情報	25,515	27,040	1,525	☆★
14	史料編纂所所蔵肖像画模本	1	955	954	☆★
15	古記録フルテキスト	45,465	77,124	31,659	
16	錦絵	4,619	4,619	0	☆
17	花押彙纂	25,896	26,086	190	☆★
18	日本古文書ユニオンカタログ	326,388	930,558	604,170	
19	大日本史料総合	706,248	771,054	64,806	
20	史料編纂所所蔵荘園絵図模本	27	27	0	☆
21	金石文拓本史料	-	2,055	2,055	新規 ☆★
22	歴史絵引	8,395	19,220	10,825	☆★
23	応答型翻訳支援システム	35,747	36,032	285	
24	近世史編纂支援(索引型)	127,082	127,082	0	
25	近世史編纂支援(標出型)	14,216	14,216	0	
26	近世史編纂支援(目録型)	14,908	14,908	0	
27	近世編年	120,839	153,657	32,818	
28	電子くずし字字典	164,916	239,194	74,278	☆★
29	欧文日本古代史料解題辞典	1,051	1,051	0	
30	調書管理システム	1,477	1,479	2	
31	編年史料集	1,917	4,526	2,609	
32	BUB	43,600	43,600	0	
33	忘形見	-	10,416	10,416	新規
34	大日本史料7編人名カード	-	55,027	55,027	新規
35	正倉院文書マルチ支援	-	3,728	3,728	新規
36	未刊古文書釈文フルテキスト	-	756	756	新規
37	Hi-CAT Plus	-	17,031	17,031	新規
	合計	3,930,590	5,340,345	1,409,755	

詳細は別添資料21-2参照

☆は画像センターPJ うち★は入力継続中のDB

資料 21-13 データベース月別アクセス件数



2015年1月には、総括シンポジウムを実施した〔資料 21-14〕。情報学との連携を強化し、歴史情報学の分野で主導的な役割を担う方向性が確認されたことは、大きな成果といえる。

資料 21-14 共同研究拠点と歴史情報 シンポジウムのプログラムと討論要旨

〔共同研究拠点と歴史情報〕シンポジウム 歴史情報の新たな発信

(2015年1月24日 東京大学福武ホール 福武ラーニングシアターにて)

プログラム

* 開会挨拶

* 第一部 歴史情報研究成果報告 (報告者はいずれも史料編纂所教員)

「実運用となった Hi-CAT Plus - 新しい発信方式の意義と課題 -」(遠藤基郎)

「地理情報蓄積システムの構築と SHIPS-DB による活用」(井上聡)

「人物史データベースと近世幕府政治史研究」(荒木裕行)

「日本史史料を対象としたテキスト構造化と読解支援」(山田太造)

* 基調講演

「学術情報の公開と利活用を支援する情報基盤の構築

- 地域研究統合情報センターの試み -」(原正一郎: 京都大学地域研究統合センター)

* 第二部 共同研究からの展開 (報告者はいずれも史料編纂所教員)

「正倉院文書マルチ支援システム SHOMUS 開発とその狙い」(山口英男)

「長篠合戦をめぐる史料収集・研究およびその利用について」(金子拓)

「宗家史料の目録化」(鶴田啓)

* パネルディスカッション

パネリスト：大山敬三 (国立情報学研究所)

木村直樹 (長崎大学多文化社会学部)

下田正弘 (東京大学大学院人文社会系研究科)

討論要旨 開催の効果

* シンポジウムには、歴史学、情報学、地域研究などの研究者、企業関係者等約 80 名が出席し、以下のような意見が出された。

・ データベース化の進展の中で、データのクオリティ面での二分化傾向が顕著になりつつある。高いクオリティを持つデータベースの維持が期待されている。

・ 地方の大学や研究機関の中には、所蔵史料の情報を自前で発信することが難しいところも多い。史料編纂所の史料情報センターとしての役割は大きい。また、教育面の効果、一般向けの利用価値などもアピールしていくべきである。

・ 史料研究の基礎となる編纂的解析を施したうえで史料情報を提供するという点で、史料情報データベース構築・公開は史料編纂所が長年継続してきた史料集編纂・出版の発展形ともいえる。

・ 異分野のデータの結合により、研究の新たな方向性が生まれることもある。異分野との共同により連携検索や資源共有化などの進展が望まれる。

・ 史料情報データベースの場合、構築・公開の前提として、組織間協議などの地道な手順が必要となる。そうした側面での活動についても先駆的役割が期待される。

・ データベースの学術評価において、蓄積・公開の結果だけでなく、プロセスを可視化して評価していくことが必要である。そのためにも、史料編纂所の情報事業の果たす役割が期待される。

* これらの意見を受けて、さらに情報学との連携を強化し、歴史情報学の分野で主導的な役割を果たすことを目指す方向性が確認されたことが、大きな効果であった。

5 画像史料解析センターにおける画像史料研究

2010 年度以降、計 20 件のプロジェクト研究(以下、「PJ」)を組織し [資料 21-15]、のべ 96 名の共同研究員の参加を得た。

資料 21-15 画像史料解析センターの研究プロジェクト

PJ 名称	経費	成果公開
第一分野 (絵画史料)		
歴史絵引・肖像画模本データベース構築 (2010～11)		肖像画模本 DB・歴史絵引 DB
荘園絵図 (2010～15)	CP・科研	荘園絵図模本 DB
長篠合戦図屏風 (2010～15)	CP・特定共同・科研	(研究業績説明書 12 参照)
東アジアにおける「倭寇」画像の収集と分析 (2011～15)	CP・特定共同・科研	(研究業績説明書 10 参照)
中近世肖像画研究 (2012～15)	CP	肖像画模本 DB・歴史絵引 DB
中近世肖像画賛の史料情報化 (2013～15)	CP	肖像画模本 DB
近世都市図解析 (13～15)	CP	センター通信に掲載
近世初期天下普請関係画像史料の蒐集・研究 (2015)	CP	

東京大学史料編纂所 分析項目 I

江戸城図・江戸図・交通図および関連資料の研究 (2015)	CP	
第二分野 (画像史料)		
古写真研究 (2010～15)	CP・所外科研・民間	(研究業績説明書 11 参照)
戊辰戦争期摺物画像研究 (2010～15)	CP・所外科研	『戊辰戦争の史料学』
赤門書庫旧蔵地図 (2010～14)	CP・科研	所蔵史料目録 DB 報告書
第三分野 (古文書画像)		
花押彙纂の画像データベース構築 (2010～15)	CP・科研	花押彙纂 DB
電子くずし字字典データベース開発 (2010～15)	CP・科研	電子くずし字字典 DB、奈文研連携検索
近世日蘭関係画像史料研究 (2010～15)	CP	センター通信に掲載
本所所蔵台紙付写真・ガラス乾板に関する研究 (2010～15)	CP・科研	画像史料解析センター研究集会「ガラス乾板の調査・保存・研究資源化に関する研究」
金石文拓本史料の整理と公開 (2010～15)	CP・科研	金石文拓本 DB
中国第一歴史档案館所蔵日本関係档案画像デジタル化 (2010)	CP・科研	『中国第一歴史档案館所蔵中日関係档案整理目録』
デジタル画像分析に基づいた古文書料紙の研究 (2011～15)	CP・科研	古文書料紙 P J・『三澤家文書目録』
古文書画像を用いた編纂システムの研究 (2012)	CP	テキストデータ

CPはセンタープロジェクト経費 (所内の競争的研究費)

11 の DB (資料 21-12 (p. 8) の☆印) を公開しており、入力継続中の 8 DB (同★印) で 89,915 件のデータを追加した。「オーストリアの写真家モーザー・コレクション展」〔研究業績説明書業績番号(以下「業績」)11〕、国際研究集会 5 件、研究集会 7 件を開催した。また『画像史料解析センター通信』を年 4 回発行し、6 冊の書籍・報告書を刊行した。

6 日本史分野における国際研究交流

日本学士院との連携事業〔業績 4〕に加え、大学共同利用機関人間文化研究機構との委託・連携事業〔業績 9〕、拠点共同研究、科学研究費助成事業 (科研費) による研究等によって、海外所在の日本関係史料の調査と研究交流が進んだ。海外出張日数はのべ 280 日 (2009 年) から、のべ 375 日 (2015 年) と増加した〔資料 21-16、17〕。

資料 21-16 海外出張の件数・日数とその内訳 (2009 年度～2015 年度)

	2009 年度	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度
出張件数	25	25	28	27	26	40	29
出張先数	46	31	35	32	32	35	37
出張延べ日数	280	308	368	383	381	490	375
延べ参加人数	32	37	45	46	43	59	32
うち (件)							
研究発表	データなし	2	1	3	8	10	10
講義等	データなし	2	2	3	5	2	1
会議参加	データなし	4	9	11	12	21	15

資料 21-17 主な国際学術交流

国名	相手機関	内容	年次
	日本学士院（国際学士院連合連携事業）	日本学士院を通じ、国際学士院連合とユネスコの協力を得て、世界各国に所在する日本関係史料のマイクロフィルム収集の受入れ機関となる（1954～1985）。その後も連携により海外史料の収集、海外研究者の招へいと国際研究集会の開催などを継続している。	継続中
ロシア	国立歴史文書館・国立海軍文書館・科学アカデミー東洋古書籍文献研究所	国立歴史文書館・海軍文書館と覚書を締結し、両館が所蔵する帝政ロシアの日本関係史料の調査研究を続けている。目録作成、研究集会の開催（一部は日本学士院と共催）。報告論文は『東洋大学史料編纂所紀要』に掲載。東洋古籍研究文献研究所からは外国人研究員を招請し史料の共同研究と翻訳を行っている。	継続中
中国	国家博物館	協定を締結し、倭寇図像の共同研究を行う。	継続中
アメリカ	イエール大学	人間文化研究機構寄りの委託研究として、イエール大学バイネキ稀覯本・手稿図書館所蔵の日本関連資料の調査を行い、展示、シンポジウムを開催、目録及び報告集を出版。	2010～ 2015
バチカン	バチカン図書館	人間文化研究機構を中心機関として同図書館所蔵のマリオ・マレガ氏が収集した豊後地域のキリシタン関係史料の調査・整理・公開を進めるプロジェクトに協力機関として参加し、特定共同研究によって研究を進めている。	2014～
フランス	コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所	学術交流協定を締結し、日本学高等研究所が所蔵する日本関係コレクションの調査撮影を行う。	2010～ 2015
ポルトガル	ポルトガル国立公文書館	協定を締結し、同文書館所蔵の日本・アジア関係資料を収集するとともに、目録情報作成に協力する。	2015～
中国・韓国	韓国国史編纂委員会・中国社会科学院近代史研究所	日中韓三か国の史料編纂と歴史研究に関わる学術交流を行う。2014年にソウルで第4回の国際学術会議が開催され、2015年には共同協定書が結び直され、持ち回りで国際学術会議を開催し、持続的な友好協力関係の基盤形成を目指す。2016年には日本で開催を予定。	2015～

国際学会での発表等が漸増し、研究の発信や交流の深化がみられる。また海外研究者を招聘しての国際研究集会を14件、海外での催事を6件開催した〔資料 21-18〕。既収集MF 2738本のデジタル化を完了し、新たにデジタル画像44325コマの海外史料を収集するなど、研究資源化も進んだ〔資料 21-19〕。

資料 21-18 主な国際研究集会

開催日	形態	テーマ	内容	参加者
2010. 5. 24	国際研究集会★	日露関係をめぐる国際研究集会	日露関係史および在ロシア日本関係史料の現状に関する報告と討議を行った。	○60
2010. 11. 12	国際研究集会★	比較研究：「抗倭図巻」と「倭寇図巻」	中国より研究者を招き、中国国家博物館所蔵「抗倭図巻」と本所所蔵「倭寇図巻」を比較検討した。	○100
2011. 9. 20	展示及び研究集会	日ロ関係史料に関するラウンドテーブル	ロシア国立歴史文書館において、「18-19世紀の日ロ関係史から」と題した展示を行い、日露関係史料研究の成果を報告した。	●
2011. 10. 7	ワークショップ	イエール大学所蔵日本関連資料について	イエール大学において、調査した日本関連史料の紹介を行った。	●
2011. 10. 18	シンポジウム★	# 倭寇と倭寇図像をめぐる国際研究集会	倭寇図巻・抗倭図巻の両絵巻に残され、本研究において新発見された「弘治」年号の意味、倭寇図像の意味を明らかにした。	○90
2011. 12. 10	シンポジウム★	# 倭寇図巻と抗倭図巻をめぐる新視角—美術史の立場から	倭寇図巻・抗倭図巻を国際的美術史研究の視点から読み解き、絵画史上の位置付けを考える。	○44
2012. 2. 21	国際研究集会★	在外日本関係史料をめぐる国際研究集会	ドイツ・ボン大学より研究者を招き、ドイツ語圏（オーストリア・ドイツ）における日本関係史料についての研究報告と討議を行った。	○
2012. 10. 5	ワークショップ	イエール大学前近代日本史料コレクション	イエール大学において開催されたワークショップで、日本文書コレクションについての研究報告を行った。	●
2013. 4. 2	研究集会★	# 倭寇と倭寇図像をめぐる国際研究集会	中国国家博物館所蔵「平番得勝図巻」の検討によって「倭寇図巻」を生み出し晩期明社会の動向について議論した。	○70 (12)
2013. 5. 7	研究集会★	日露関係史料をめぐる国際研究集会	サンクトペテルブルクから3人の研究者を招聘し、ロシア海軍をテーマにした2報告や、1889年の有栖川宮のロシア訪問に関する報告を行った。	○50 (10)
2013. 10. 4	ワークショップ	日本関連史料ワークショップ	イエール大学において開催されたワークショップで、調査史料についての研究報告を行った。	●
2013. 12. 25	公開講演会★	イエズス会古文書セミナー	16-17世紀に日本で活動したイエズス会宣教師の文書について	○60

東京大学史料編纂所 分析項目 I

			海外の専門家によるセミナーを日本学士院と共催した。	
2014. 1. 15	研究集会★	#倭寇と倭寇図像をめぐる研究集会—美術史の立場から2—	これまでの成果の総合化をはかり、二つの図巻の中国絵画の流れの中での位置づけが示された。	○40 (9)
2014. 3. 13 ～16	シンポジウム☆	日本宗教研究における新しい史料学	プリンストン大学宗教学部と共催で、同大学にて日本・アメリカの研究者・大学院生の参加を得て、ワークショップを開催した。	●40 (40)
2014. 5. 27	国際研究集会★	日露関係史料をめぐる国際研究集会	ロシアから2名の研究者を招聘し、ロシアと琉球に関わる史料群や明治初年の日本の対外政策をテーマとする報告3本を得た。	○60 (8)
2014. 11. 1	シンポジウム☆	#バチカン図書館所蔵マレガ神父収集豊後キリシタン文書群の魅力	バチカン図書館の研究者を招聘して、大分県内で開催し、バチカン図書館所蔵の豊後地域近世史料について報告を行った。	○200 (招請2)
2015. 3. 5～ 6	国際研究集会☆	日本に関する貴重史料—イエール大学所蔵前近代書籍・史料に関する国際会議	イエール大学において国際研究集会を共催し、同大学所蔵の日本関連資料について、調査に基づく研究報告を行った。	●100 (80)
2015. 4. 20	研究集会★	倭寇と倭寇図像をめぐる国際研究集会	倭寇と倭寇図像をめぐる研究成果を総括し、中国文学や典籍に表われる倭寇など、新たな研究の展開を目指す報告を得た。	○40 (招請1)
2015. 4. 30	レクチャー☆	東大・イエール・イニシアティブ第五回山川健次郎記念 レクチャー	イエール大学教授による明治初期の日本人留学生とアメリカ書籍コレクション成立に関するレクチャーを共催した。	○50
2015. 5. 19	国際研究集会★	日露関係史料をめぐる国際研究集会	ロシアから2名の研究者を招聘し、1862年日本使節団のロシア訪問、日本と関わったロシア海軍提督等についての報告を得た。	○60 (招請2)
2015. 9. 12	シンポジウム☆	#キリシタンの跡をたどる—バチカン図書館所蔵マレガ収集文書の発見と国際交流	バチカン図書館所蔵の豊後地域近世史料について、イタリアで調査経過を報告し、市民・研究者との共有を図った。	●130 (約100)

★は主催、☆は共催、#は拠点共同研究
参加者欄○は海外よりの招請あり、●は海外開催、人数の()内は外国人

資料 21-19 海外史料の研究資源化

(1) 既収集マイクロフィルムのデジタル化 (2013~2015)

	スキャン済	簿冊データ付与	Hi-CAT Plus 搭載	
総本数	本数	本数	本数	コマ数
2738	2738	1013	932	535,580
主な内訳				
英語史料	921	921	874	487,684
オランダ語史料	1425	1425	58	47,896

(2) ボーンデジタルによる収集

	コマ数	主な内訳
2009 年度末	0	
2015 年度末	44325	中国国家博物館所蔵史料 モンソーン文書 (ポルトガル国立文書館 (トルレ・ド・トンボ) 所蔵)

7 外部資金による多彩な研究の展開

科研費については、学術創成研究費 (2007-2011) の終了により総額が若干減少したものの、平均採択率 60% を維持し、常勤教員 55 名に対し採択課題 30 件、二人に一人が研究代表者として PJ を遂行している [資料 21-20、21]。他に人間文化研究機構や自治体からの委託研究など、外部資金の活用により研究の多様性が増した。

資料 21-20 外部資金の獲得状況

① 外部資金の獲得状況 (単位: 千円)

区分		2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度
科研費	件数	46	43	43	42	36	36
	金額	297,390	263,650	207,940	159,990	190,790	191,798
寄附金	件数	14	2	5	9	4	5
	金額	2,096	2,400	2,101	16,392	11,000	5,590
共同研究費	件数	2	1	1	0	0	0
	金額	31,210	29,890	29,900	0	0	0
受託研究費	件数	1	1	1	1	1	2
	金額	1,199	1,199	1,199	1,199	1,199	1,699
その他補助金	件数	1	1	1	1	1	1
	金額	5,000	4,700	4,465	4,331	5,800	1,000
合計	件数	64	48	51	53	42	44
	金額	336,895	301,839	245,605	181,912	208,789	200,087

②科学研究費補助金交付件数及び金額(単位：千円)

区分		2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
学術創成研究	件数	1	1	0	0	0	0
	金額	109,070	108,160	0	0	0	0
基盤研究(S)	件数	1	1	2	1	2	2
	金額	37,700	27,300	69,680	39,260	85,930	88,140
基盤研究(A)	件数	5	6	6	7	6	5
	金額	74,620	65,910	66,950	63,050	52,130	51,350
基盤研究(B)	件数	8	7	7	6	4	5
	金額	39,130	28,990	33,280	18,980	14,300	16,770
基盤研究(C)	件数	8	7	7	8	9	8
	金額	8,060	7,670	10,010	13,520	13,520	10,660
挑戦的萌芽研究	件数	0	1	1	0	0	0
	金額	0	650	520	0	0	0
若手研究(A)	件数	0	0	0	0	1	1
	金額	0	0	0	0	910	2,080
若手研究(B)	件数	9	7	4	5	5	6
	金額	8,710	6,370	3,900	4,680	4,940	6,110
研究成果公開促進費	件数	4	4	3	3	1	2
	金額	12,400	11,700	13,000	9,700	8,400	8,500
研究活動スタート支援	件数	0	0	0	0	0	1
	金額	0	0	0	0	0	1,300
奨励研究	件数	0	0	1	0	0	0
	金額	0	0	400	0	0	0
特別研究員奨励費	件数	10	9	12	12	8	6
	金額	7,700	6,900	10,200	10,800	10,660	6,858
合計		46	43	43	42	36	36
		297,390	263,650	207,940	159,990	190,790	191,798

③科学研究費補助金採択状況(2010～2015年度)

	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度	計
申請件数	18	24	30	20	19	21	132
新規採択件数	10	16	22	12	9	12	81
採択率	56%	67%	73%	60%	47%	57%	60%
継続採択件数	36	27	21	30	27	24	165
採択件数 計	46	43	43	42	36	36	246

資料 21-21 外部資金等による主なプロジェクト研究(2010～2015)

期間	課題名称	外部資金
(科学研究費助成事業)		
2007～2010	東アジアの国際環境と中国・ロシア所在史料の総合的研究	基盤研究 (A)
2007～2011	目録学の構築と古典学の再生—天皇家・公家文庫の実態復元と伝統的知識体系の解明—	学術創成研究費
2008～2011	画像解析とフィールドワークに基づく荘園絵図情報システムの構築	基盤研究 (A)
2008～2012	史料デジタル収集の体系化に基づく歴史オントロジー構築の研究	基盤研究 (S)
2009～2011	「地図史料学の構築」の新展開—科学的調査・復元研究・データベース	基盤研究 (A)
2009～2012	協調作業環境下での中世文書の網羅的収集による古文書学の再構築	基盤研究 (A)
2010～2013	宗家文書を素材とした分散所在大名家史料群の総合的研究	基盤研究 (A)
2011～2014	ボーンデジタル画像管理システムの確立に基づく歴史史料情報の高度化と構造転換の研究	基盤研究 (A)
2011～2014	ロシア・中国を中心とする在外日本関係史料の調査・分析と研究資源化の研究	基盤研究 (A)
2011～2014	法令・人事から見た近世政策決定システムの研究	基盤研究 (A)
2012～2015	正倉院文書の多元的解析支援と広領域研究資源化	基盤研究 (A)
2012～2015	画像解析と歴史・地理情報の高度活用に基づく荘園絵図の総合的研究	基盤研究 (A)
2012～2016	日本目録学の基盤確立と古典学研究支援ツールの拡充—天皇家・公家文庫を中心に—	基盤研究 (S)
2013～2016	未刊古文書積文作成のための協調作業環境の構築	基盤研究 (A)
2014～2018	マルチアーカイヴァル的手法による在外日本関係史料の調査と研究資源化の研究	基盤研究 (S)
2014～2018	歴史知識情報のオープンデータ化にむけたスキームと情報利活用手法の再構築	基盤研究 (A)
2015～2018	原史料メタ情報の生成・管理体系の確立及び歴史知識情報との融合による研究高度化	基盤研究 (A)
(受託研究)		
2010～2015	日本関連在外資料調査研究事業	人間文化研究機構より受託
2010～	福岡市域に関わる史料の調査及び研究	福岡市史編集委員会より受託
2015～	西尾市域ならびに周辺地域に関わる史料の調査及び研究	愛知県西尾市より受託

8 著作・論文による成果発表

所属教員は史料集刊行・DB 構築に加え、複数の PJ に参加し、年平均 1 人当たり 3.7 本の著作・論文を発表しており、活発に研究活動が行われていることを示している〔資料 21-22〕。

年度	2010			2011			2012			2013			2014			2015		
形態	著書	論文	編纂	著書	論文	編纂	著書	論文	編纂	著書	論文	編纂	著書	論文	編纂	著書	論文	編纂
点数	35	141		26	166		29	200		27	173		30	217		43	159	
	181		12	192		10	229		9	200		9	247		8	202		10
1人当り	3.12			3.31			3.95			3.64			4.49			3.67		

9 史料原本の保全と研究

修理のための解体に伴う原本史料の精査により、史料情報の取得・研究が進展した〔資料 21-23、業績 5〕。

該当年度	事業名等	内容
2012-14	「樺山家文書 伝家亀鏡」16 巻の修理・再装備	卷子装の同史料を解体修理・調査したのち、それぞれの文書作成時の独立した状態を復元した。
2013-15	「中院一品記」の修理・再装備	伝来の過程で錯簡・脱落、他への流出等が生じていた同史料を解体修理するとともに、内容の精査・逸文の探索等を実施し、記主の執筆時の配列を可能な限り復元した。解体時には、奈良市の大和文華館の特別展に出陳し、一紙単位での史料情報を公開した。
2014-15	「落合左平次道次背旗」の修理	同史料は合戦時に用いられた旗指物で、卷子装とされていたが、解体時に表裏に人物像が描かれていることを確認し、鑑賞・保存に適した装備に改めた。
2015	「蔣州咨文」の重要文化財指定	1977 年の購入史料だが、状態が悪く、開閉困難であった。2007-08 年度に修理を実施し、閲覧・研究が可能となり、その歴史的価値が認められるに至った。
史料保存技術室 (http://www.hi.u-tokyo.ac.jp/gijyutu/frtec.html)		

10 社会連携活動と情報発信

2010 年度から 3 年間「社会連携研究部門」を設置し、同部門で実験的に構築した史料集や画像を検索・閲覧するシステムを商品化した（業績 8）。〔資料 21-24〕

資料 21-24 社会連携部門の活動

設置期間	2010 年度～2012 年度
設置目的	「図書館等所蔵史料の調査・整備研究」 産学連携組織により、公共図書館などに所蔵されている歴史史料・刊行物を有効活用するためのデジタル化仕様について研究することを目的とする。
参加企業	大日本印刷（株）・（株）図書館流通センター・丸善（株）・（株）雄松堂書店・（株）コンテンツ
研究プロジェクト	『石川県史』検索システムの構築研究 石川県立図書館との協力のもとに、『石川県史』をモデルに、自治体史のデジタル化、テキスト検索及び編纂史料閲覧のためのシステムを開発し、実用化に向けた検討を行った。
主な成果	石川県立図書館においてシステムの実利用が実現し、また TRC-ADEAC 社により「歴史情報検索システム」として商品化され、これを長野県立歴史館が導入するなど、実用化の道が開かれた。

教員は、自治体史の編纂、文化財調査・保存等、国や自治体の各種委員として専門性を生かした社会貢献をしている〔資料 21-25〕。東日本大震災後には、教員・技術職員が歴史資料レスキューに参加した。

資料 21-25 教員の社会連携活動（2010～2015 年度）

	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度	合計 (人)
1 地方自治体の歴史編纂関係委員	15	19	15	24	19	26	118
2 国（関連）の機関委員等	9	6	11	9	13	24	72
3 文化財等調査関係委員	10	9	12	5	8	8	52
計 (人)	34	34	38	38	40	58	242

研究成果を社会に還元するため、一般向けのシンポジウム・講座等を積極的に行った〔資料 21-26〕。また、最新の研究をわかりやすく説明する新書の出版を試み、所蔵史料の展示会を 2010 年（見学者 920 名）と 2013 年（同 1300 名）に開催した。〔資料 21-27〕 展示を機に最古のクメール文字写本が確認されるなど研究も進展した〔業績 14〕。

資料 21-26 一般向けの講演会・セミナー・展示等の開催

(1) 件数と参加者数

年度		2010	2011	2012	2013	2014	2015
シンポジウム・講演会	件数	0	0	5	2	2	5
	参加人数	0	0	1182	120	346	1018
セミナー・公開講座	件数	1	7	3	19	24	10
	参加人数	13	1901	804	2133	2272	2174
その他	件数	1	4	1	2	1	2
	参加人数	920	1315	500	2420	1683	1803
合計	件数	2	13	9	23	27	17
	参加人数	933	3216	2486	4673	4301	4995

(2) 主な一般向けの講演会・セミナー・展示

年月日	形態	名称	参加者数
2010. 11. 11	セミナー	アフタヌーンセミナー二階堂家文書の世界	13
2010. 11. 12-13	展示	第 35 回史料展覧会(所蔵原本史料より)	920
2011. 7. 21	報告会	被災史料救出ボランティア参加報告会	55
2011. 10. 1	セミナー	東京大学史料編纂所・学術創成研究費「目録学の構築と古典学の再生」共催東京大学史料編纂所セミナー「王朝の「雅」を伝える公家文庫—禁裏文庫の歴史と陽明文庫の名品—」	241
2011. 12. 23	展示	オープンキャンパス特別展示「新発見！倭寇図を科学する」	750
2012. 1. 22 -2. 19	公開講座	学術創成研究費「目録学の構築と古典学の再生」主催、立命館大学共催、陽明文庫・東京大学史料編纂所後援「陽明文庫講座：よみがえる宮廷文化の華」(計5回)	1570
2012. 1. 26	小展示	東京大学史料編纂所木展「國學院大学図書館所蔵「舜旧記」天正 11・12・13・20 年記紙背文書」	90
2012. 2. 20-21	企画展示	東京大学史料編纂所企画展示「古写真展示会：オーストリアの写真家モーザー・コレクション展—ガラスネガから復元する明治初期の日本—」	420
2012. 3. 11	セミナー	東京大学史料編纂所・長野県立歴史館共催歴史館セミナー「信濃古代史の再構築に向けて」	90
2012. 8. 5	公開講演会	島根県益田市教育委員会「益田氏系図の研究成果報告会」	90
2012. 8. 7	展示	オープンキャンパス特別展示「画像史料に見る歴史の舞台」	500
2012. 9. 1- 2013. 1. 26	公開講座	西尾市岩瀬文庫特別連続講座「史料から歴史の謎を読み解く」(計3回)	240
2012. 10. 13- 2013. 1. 19	公開講座	金鶏会公開講座【新・古典を読む—歴史と文学—】(計6回)	480
2012. 11. 3、 11. 10	公開講演会	愛知県新城市設楽原歴史資料館公開講演会(計2回)	140
2012. 11. 17	公開講演会	長崎県立対馬歴史民俗資料館企画展関連講演会	70
2013. 12. 16- 2014. 2. 17	公開講演会	陽明文庫講座「今にいきづく宮廷文化」(計3回)	882
2013. 3. 11	公開講座	長野県立歴史館セミナー「信濃古代史の再構築に向けて2」	84
2013. 6. 1	講演会	上杉家にとっての長谷堂合戦の記憶	70
2013. 7. 7	セミナー	東洋文庫特別展示関連企画「マリーアントワネットと東洋の貴婦人—キリスト教文化を通じた東西の出会い—」	50
2013. 8. 8	展示	オープンキャンパス特別展示「東博本洛中洛外図屏風」の復原模写図、幕末・維新期の古写真のデジタル復元	1120
2013. 6. 1 -12. 21	公開講座	金鶏会公開講座「新・古典を読む—歴史と文学—」(計12回)	880
2013. 10. 5- 2014. 3. 29	公開講座	西尾市岩瀬文庫特別連続講座「史料から歴史の謎を読み解く 2013」(計3回)	280

東京大学史料編纂所 分析項目 I

2013. 9. 21 -11. 17	公開講座	陽明文庫講座「いま世界にはばたく宮廷文化」 (計3回)	923
2013. 11. 8-09	展示	第36回史料展覧会ー東アジアと日本・世界と日本ー	1300
2014. 3. 16	講演会	関市立図書館講演会「陽明文庫所蔵『御堂関白記』と藤原道長」	50
2014. 3. 22 -4. 26	公開講座	【魏志倭人伝を読む】「邪馬台国の謎に迫る」 (計4回)	320
2014. 6. 28-8. 2	公開講座	「いま明かされる古代三四」(計5回)	400
2014. 8. 30 -11. 8	公開講座	二〇一四年秋季「正倉院文書連続講座・一」(計6回)	480
2014. 7. 26- 2015. 2. 1	公開講座	西尾市岩瀬文庫連続講座「史料から歴史の謎を読み解く二〇一四」(計3回)	250
2014. 8. 6	展示	オープンキャンパス特別展示「画像史料の研究と史料集～屏風絵・絵巻・絵図・古写真から歴史の舞台が甦る!～」	1683
2014. 11. 1	公開シンポジウム	バチカン図書館所蔵マレガ神父収集豊後キリシタン文書群の魅力	200
2014. 11. 16 -12. 14	公開講座	関市立図書館講座「華麗なる平安の世界」(計3回)	280
2014. 11. 22	講演会	熊本県立美術館「信長からの手紙」展特別講演会	146
2015. 1. 24、2. 22	公開講座	第5回「陽明文庫講座」「今、紐解く宮廷文化」 (計2回)	698
2015. 1. 31	公開講座	長篠城址史跡保存館歴史講座「信長・奥平の世界再発見」	94
2015. 4. 11-5. 23	公開講座	2015年 善光寺御開帳記念講座【続・古典を読むー歴史と文学ー】(計4回)	320
2015. 7. 11	公開シンポジウム	公開国際文化フォーラム『ザビエルと戦国日本』	100
2015. 7. 29-9. 2	公開講座	「正倉院文書は宝の山ー史料で読み解く奈良時代ー」(計3回)	50
2015. 8. 5	展示	高校生のための東京大学オープンキャンパス「画像史料の研究と史料集」	1764
2015. 8. 1-9. 12	公開講座	【続・古典を読むー歴史と文学ー】「いま明かされる古代35&戦国」(計6回)	480
2015. 10. 24- 12. 19	公開講座	2015年【続・古典を読むー歴史と文学ー】「いま明かされる古代36」(計4回)	320
2015. 10. 25- 2016. 1. 30	公開講座	関市立図書館講座「寺だ!織田だ!巻物だ!」	240
2015. 11. 15	公開シンポジウム	共同研究シンポジウム「多久家文書を読みなおす」	80
2015. 11. 1- 2016. 3. 6	公開講座	西尾市岩瀬文庫特別連続講座「史料から歴史の謎を読み解く2015」	170
2016. 1. 24、2. 20	公開講座	第6回「陽明文庫講座」(計2回)	519
2016. 2. 21	公開シンポジウム	共同研究シンポジウム「長篠・設楽原の戦いを考える」	430
2016. 3. 6	講演会	たつの市中央公民館講演会「新発見文書から見る秀吉と脇坂安治の関係」	300
2016. 3. 12	講演会	近世史講演会「織田信長と長篠の戦い」	108

資料 21-27 史料展覧会の開催

	2010 年度	2013 年度
期間	2010 年 11 月 12～13 日(2 日間)	2013 年 11 月 8～9 日(2 日間)
テーマ	ホームカミングデイに合わせた研究所紹介、耐震工事完了の披露を兼ねた所蔵名品展示	企画展示「東アジアと日本、世界と日本」及び新収史料展示、プロジェクト展示、研究所紹介
主要な展示史料	「倭寇図巻」原本 『史料編纂所影印叢書』収録史料 「島津家文書」より 「拾芥抄」「愚昧記」(修復完成披露)	「東鑑」「高麗牒状不審条々」「蔣州咨文」「明国筭符」「東埔寨国鄭天賜書状写」「信牌」「蝦夷地絵図」「露国使節レザノフ来航絵巻」「米国水師提督ペリー自筆書翰」
見学者数	920 名	1300 名
効果	・ホームカミングデイに合わせ、修復完成史料、絵画史料等一般来場者を意識した展示を行い、別館耐震工事完了後の閲覧等のサービス再開を周知した。	短期の開催を惜しむ声が多く、展示を機に、「東埔寨国鄭天賜書状写」はクメール文字を写した古文書が紙に書かれた最古のものであることが判明するなど、研究も進展した。

(水準) 期待された水準を上回る。

(判断理由)

- ①系統的組織的な史料調査の継続と共同研究による新たな調査の開始〔資料 21-28-①〕。
 - ②基幹史料集の安定的刊行〔資料 21-28-②〕。
 - ③デジタル媒体による歴史情報公開システムの整備と、歴史情報 DB を通じての成果公開による、日本史研究のインフラ構築の進展〔資料 21-28-③〕。
 - ④国外所在史料及び外国語史料の調査、海外機関との共同研究、海外での研究発信等、国際的研究交流の進展〔資料 21-28-④〕。
 - ⑤社会連携部門の活動、国や自治体の文化財行政・社会教育等への協力、市民への研究成果の発信〔資料 21-28-⑤、共同研究の項も参照〕。
- これらから、本研究所の活動は常勤教員減少(資料 21-28-①)の中でも高い水準を維持し、多様な関係者の期待を上回ると判断する。

資料 21-28 第 2 期中期計画期間中の研究活動の状況 (まとめ)

	項目	第 1 期 (2004~2009)	第 2 期 (2010~2015)	関連資料
①	常勤教員数	60 名 (2009 年度)	55 名 (2015 年度)	7 (p. 5)
①	出張延べ日数	1669 日 (2009 年度)	1764 日 (2015 年度)	8 (p. 6)
②	基幹史料集の刊行	59 冊	58 冊	11 (p. 7)
③	公開データベース数	24 (2009 年末)	37 (2015 年度末)	12 (p. 8)
	データ総件数	3,930,590 件 (2009 年度末)	5,340,345 件 (2015 年度末)	
	デジタル画像の蓄積	0 コマ (2009 年度末)	363,301 コマ (2015 年度末)	9 (p. 7)
	採訪デジタル画像の Hi-CAT Plus 公開	0 コマ (2009 年度末)	275,742 コマ (2015 年度末)	10 (p. 7)
④	海外出張延べ日数	280 日 (2009 年度)	375 日 (2015 年度)	16 (p. 11)
	海外での発表・講義	4 件 (2010 年度) *2009 年度データなし	11 件 (2015 年度)	
	海外史料のデジタル収集 (③の内数)	0 コマ (2009 年度末)	44,325 コマ (2015 年度末)	19 (p. 15)
⑤	教員の社会連携活動 (各種委員延べ数)	34 人 (2010 年度) *2009 年度データなし	58 人 (2015 年度)	25 (p. 19)
	一般向けの講演会・展示・セミナー等	3 件 (2009 年度 所報記載 人数なし)	17 件 参加者 4995 名 (2015 年度)	26 (p. 20-22)

観点 大学共同利用機関、大学の共同利用・共同研究拠点に認定された附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の実施状況

(観点に係る状況)

「日本史史料の研究資源化に関する研究拠点」として、古代・中世・近世・海外・複合の領域毎に研究課題を定めて共同研究員を募る特定共同研究と、課題を募集する一般共同研究を設定し、公募と協議会の審議に基づき採択した課題を遂行した〔資料 21-29〕。

資料 21-29 共同研究の課題と参加者数

(1) 特定共同研究

【領域】柱	研究課題名 (所内代表者)	研究期間(年度)	共同研究員数	
			所外	所内※
【古代史料領域】 古代史料の研究資源化	正倉院文書に関する史料学情報の研究資源化連携 (山口英男)	2010～2011 (2年間)	8	2
【古代史料領域】 古代史料の研究資源化	9・10世紀古文書に関する史料学情報の総合化研究 (山口英男)	2012～2015 (4年間)	6	4
【中世史料領域】 中世大規模・広域史料群の研究資源化	春日社旧社家「大東文書」の調査・撮影 (藤原重雄)	2010～2012 (3年間)	3	4
【中世史料領域】 中世大規模・広域史料群の研究資源化	薬師寺中世史料の研究 (及川亘)	2013～2015 (3年間)	4	3
【近世史料領域】 近世大名家史料の研究資源化	宗家史料の目録化 (鶴田啓)	2010～2013 (4年間)	5	1
【近世史料領域】 近世大名家史料の研究資源化	佐賀藩家臣多久家史料の研究 (小宮木代良)	2014～2015 (2年間)	7	2
【海外史料領域】 在外日本関係史料の研究資源化	ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所所蔵サハリンアイヌ交易帳簿の研究 (保谷徹)	2010年度 (1年間)	3	2
【海外史料領域】 在外日本関係史料の研究資源化	本所所蔵品ならびに中国国家博物館所蔵品にみる「倭寇」像の比較研究 (須田牧子)	2011～2013 (3年間)	5	5
【海外史料領域】 在外日本関係史料の研究資源化	『豊後切支丹史料』及びその原文書の史料学的研究 (松井洋子)	2014～2015 (2年間)	10	6
【複合史料領域】 合戦の記憶をめぐる総合的研究	関連史料の収集による長篠合戦の立体的復元 (金子拓)	2010～2015 (6年間)	13	8

(研究員数は最大時を取った。※所内代表者は含まない。)

(2) 一般共同研究

年度		2010	2011	2012	2013	2014	2015	延べ数
応募課題数 (件)		8	14	8	11	13	20	74
採択課題数 (件)		8	10	8	10	12	15	63
共同研究員数 (人)	所外	18	25	25	35	46	62	211
	所内	14	20	12	18	20	28	112

応募数、受入人数やその所属機関数は次第に増加し、2015年度には87の機関から103名が共同研究員となった。大学所属の研究者に加え、自治体や民間の施設に所属する研究者との共同が進み〔資料 21-30〕、国外機関、理系を含め歴史学以外の分野の研究者との連携も強まった。地域の研究者と協力し、各地に所在する史料の研究資源化を進めた〔資料 21-31〕。

資料 21-30 所外共同研究員の所属内訳 (2010～2015 年度)

		2010	2011	2012	2013	2014	2015	延べ数	平均
学内 (法人内)	機関数	0	3	1	2	2	3	11	1.8
	受入人数	0	3	2	2	2	6	15	2.5
国立大学	機関数	8	11	8	7	6	7	47	7.8
	受入人数	10	14	9	9	6	9	57	9.5
公立大学	機関数	3	3	2	2	4	5	19	3.2
	受入人数	3	3	2	2	4	5	19	3.2
私立大学	機関数	6	9	12	17	24	24	92	15.3
	受入人数	6	9	12	18	31	27	103	17.2
大学共同利用 機関法人	機関数	0	2	1	1	2	2	8	1.3
	受入人数	0	3	1	1	3	3	11	1.8
独立行政法人等 公的研究機関	機関数	2	3	1	15	21	26	68	11.3
	受入人数	4	4	1	22	27	30	88	14.7
民間機関	機関数	1	1	1	0	2	5	10	1.7
	受入人数	1	1	1	0	2	5	10	1.7
外国機関	機関数	4	3	3	2	0	0	12	2.0
	受入人数	4	3	3	3	0	0	13	2.2
その他	機関数	9	16	19	12	9	15	80	13.3
	受入人数	13	22	22	13	11	18	99	16.5
計	機関数	33	51	48	58	70	87	347	57.8
	受入人数	41	62	53	70	86	103	415	69.2

資料 21-31 共同研究による史料調査先

年度	主な調査先
2010	奈良文化財研究所・春日大社・新城市設楽歴史資料館・新城市長篠合戦遺跡・徳川美術館・名古屋市博物館・長崎県立対馬歴史民俗資料館・三河武士のやかた家康館・岡崎市立中央図書館・熊本県立美術館・熊本大学・静岡市美術館・国立国会図書館・上越市立総合博物館・和歌山県立文書館・中津市木幡記念図書館・佼成図書館・大徳寺・九州国立博物館・山口県文書館・島根大学・ロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所
2011	宮内庁正倉院事務所・奈良国立博物館・大阪市立大学・花園大学・奈良女子大学・根津美術館・春日大社・奈良県立図書情報館・国際日本文化研究センター・長崎県立対馬歴史民俗資料館・名古屋大学・毛利博物館・小川八幡神社・長野県立歴史館・福井県立若狭歴史民俗資料館・名古屋市博物館・奈良国立博物館・岡山県新見市・安保清和氏宅・八坂神社・熊本大学・大徳寺・長谷川和紙工房・京都大学・萩博物館・山口県文書館・米沢市上杉博物館・中国国家博物館
2012	京都国立博物館・奈良文化財研究所・長野県東筑摩郡福満寺・長野県立歴史館・長野市立博物館・兵庫県朝来市教育委員会・同豊岡市教育委員会・同南丹市教育委員会・兵庫県加東市・兵庫県立歴史博物館・姫路市・島根県立古代出雲歴史博物館・大阪城天守閣・兵庫県篠山市教育委員会・熊本県内・福岡県内・京都市右京区・名古屋市立博物館・京都府立総合資料館・春日大社・奈良国立博物館・奈良市・長崎県立対馬歴史民俗資料館・長崎歴史文化博物館・九州国立博物館・佐賀市・中津城・熊本県立美術館・島原市立図書館・岐阜市歴史博物館・滋賀県立安土考古博物館・和歌山県図書館・堺市博物館・和歌山県立博物館・韓国国史編纂委員会・中国国家博物館
2013	広島大学・三原市立中央図書館・鹿児島大学・神宮文庫・熊本市・熊本県立美術館・熊本図書館・鹿児島県歴史資料センター黎明館・陽明文庫・新潟県立歴史博物館・佐渡市博物館・九州大学・島根県益田市・太田市立図書館・山口県文書館・島根県立図書館・鳥取県立博物館・鳥取市歴史博物館・宗像神社・長野県中野市山田家史料館・須坂市史編さん室・長野県須坂市・京都市右京区・同志社大学・早稲田大学図書館・学研究資料館・国立歴史民俗博物館・京都府立総合資料館・京都文化博物館・京都御所・名古屋市立博物館・薬師寺・長崎県立対馬歴史民俗資料館・九州国立博物館・長崎大学・長崎歴史文化博物館・大谷大学図書館・毛利博物館・上杉博物館・徳島大学・熊本大学・中国国家博物館・山東省博物館
2014	八戸市立図書館・都城市立美術館・鹿児島大学・豊橋市美術館・豊橋市中央図書館・天理大学天理図書館・十念寺・大阪市立中之島図書館・龍谷大学大宮図書館・関西大学総合図書館・逸翁美術館・一宮市・多和文庫・佐渡市博物館・新潟市・京都市・東近江市・和歌山市・浜田市・益田市・大阪大学・大分県立先哲史料館・出雲市・三原市立図書館・武田科学振興財団杏雨書屋・大阪歴史博物館・奈良国立博物館・国立歴史民族博物館・京都府立総合資料館・京都府立大学・猪熊恩頼堂・薬師寺・秋田県立図書館・多久市郷土資料館・佐賀県立図書館・竹田市歴史資料館・臼杵市・松浦史料博物館・和歌山県文書館・熊本県立美術館・八代市・人吉市・バチカン図書館・トルレ・ド・トンボ国立文書館・ポルトガル海外領土史料館・バスク海事博物館・ザビエル城博物館

2015	<p>米原市成菩提院・京都大学総合博物館・宮内庁書陵部・国文学研究資料館・京都府立総合資料館・住友史料館・大阪府立中之島図書館・京都市歴史資料館・毛利博物館・山口県立博物館・徳川美術館・陽明文庫・京都国立博物館・林原美術館・尚古集成館・鹿児島歴史資料センター黎明館・龍谷大学図書館・東京大学学総合図書館・新潟県佐渡市・山形県西置賜郡白鷹町・南陽市・上杉博物館・遠野町歴史博物館・福島県立歴史資料館・鶴ヶ城天守閣・福島県立博物館・穴水町歴史民俗資料館・金沢市立玉川図書館近世史料館・中京大学・醍醐寺・泉涌寺・明石市光触寺・兵庫県佐用町・姫路市大覚寺・たつの市・西宮市・明石市・上田市立博物館・豊岡市出石神社・総持寺・福成寺・光行寺・名古屋市・龍野神社・龍野歴史文化資料館・斑鳩寺・兵庫県立歴史博物館・和歌山県立文書館・和歌山県立博物館・海南市禅林寺・京都市頂妙寺・和歌山市木本八幡宮・和歌山県高野町蓮花院・蓮華定院・櫻池院・頂妙寺・三井寺・島根県古代文化センター・島根県立図書館・浜田市岡見八幡宮文書・函館市中央図書館・大分市・大分県立先哲史料館・慶應義塾大学図書館・沖縄県立博物館・観音寺市萩原寺・九州国立博物館・大津市歴史博物館・MIHOMUSEUM・名古屋市蓬佐文庫・薬師寺・真福寺・多久市郷土資料館・バチカン図書館・白杵市立白杵図書館・白杵市歴史資料館・白杵市教育委員会文化財管理センター・ヤマコ白杵美術館・丸亀市立資料館・鳥取県立博物館・犬山城白帝文庫・カリフォルニア大学パークレー校 C.V. スター東亜図書館・鶴岡市致道博物館</p>
------	---

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

- ①新たに開始した拠点の活動によって各地所在の史料の調査を行い、新しい史料の研究資源化と研究の推進という期待に応えている。
- ②自治体・民間施設等所属の研究者とも連携を強化し、地域の歴史研究の促進等、成果の社会還元を実現し、注目すべき取り組みとして取り上げられている〔資料 21-32〕。

資料 21-32 国立大学法人・大学共同利用機関法人の改革推進状況【平成 26 年度】(抜粋)

III 研究の質の向上

共同利用・共同研究体制の整備 (p. 33)

具体的取組例

(中略)

東京大学史料編纂所では、大学や国立研究機関に加え、特に地方自治体の博物館等の研究者との共同研究の推進を図っており、平成 26 年度は和歌山県、新潟県、大分県の博物館等 30 機関から 37 名の共同研究者を受入れ、各地域に所在する史料の調査とデータ収集を進めるなど、地域とのネットワークの強化を図っている。

(後略)

- ③海外史料領域を設け、海外所在史料の調査に関わる共同研究を進めている。
 - ④拠点の研究資料提供型機能の基盤として日本史情報 DB を維持発展させた〔資料 21-12、13 (pp. 8-9)〕。
- 拠点としての活動は、文部科学省による期末評価において A 評価を受けており〔資料 21-33〕、期待される水準を上回ると判断する。

資料 21-33 期末評価結果(抜粋)

2 総合評価

(評価区分) A

(評価コメント)

共同利用・共同研究拠点として、日本史史料の整備というミッションを掲げて、資料の収集、閲覧、データベースの公開を通じて、研究者コミュニティの発展に貢献している点が評価できる。

(後略)

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

観点 研究成果の状況(大学共同利用機関、大学の共同利用・共同研究拠点に認定された附置研究所及び研究施設においては、共同利用・共同研究の成果の状況を含めること。)

(観点に係る状況)

研究業績説明書に取り上げた研究テーマを、以下のAからEの特色ごとに分析する。

A史料研究の成果を生かした編纂〔資料21-34〕

資料21-34 Aに関連する業績

業績	研究テーマ	内容
1	歴史的事象に基づく編年的史料研究	『大日本史料』の編纂と大日本史料総合データベース
2	古文書・古記録の研究と編纂	『大日本古文書』『大日本古記録』編纂とフルテキストデータベース
3	近世政治史料の研究	『細川家史料』『島津家文書』『幕末外国関係文書』編纂と近世編纂支援データベース
4	海外所在史料の収集と研究	日本学士院との連携による外国語史料の収集と『日本関係海外史料』の編纂
5	貴重史料の研究と保全	『中院一品記』の解体修理に伴う原本の徹底調査と翻刻、編纂準備

史料学研究に立脚した基幹史料集58冊を公刊した〔資料21-11(p.7)、別添資料21-1、業績1～4〕。編纂の成果は各種DBに付加されている〔別添資料21-2〕。DBへのアクセス数の伸び〔資料21-13(p.9)〕は、史料集の信頼度と利便性への高い評価の結果である。外国語史料の収集・研究・編纂事業については、国際学士院連合が行った外部評価(2013)において、Excellentとの評価を受けている〔資料21-35〕。

資料21-35 国際学士院連合(UAI)による外部評価(匿名)の評価報告(翻訳)

報告1

本プロジェクトは日本学士院のもっとも重要な事業であり、この58年間にわたって、東京大学史料編纂所によって遂行されている。その成果は学問的で信頼できる出版物として、各地の図書館等に存在する史料原本の翻刻を世界中で利用可能にしている。それらは日本の研究者だけでなく世界中で使われ、これまでにある版より格段に優れている。すでに本プロジェクトはUAIの財政支援を受けてはいないが、あらゆる点で、すぐれた企画であり、内容も優秀である。

報告2

本プロジェクトは、多くの学問分野における研究にとって重大な問題である、史料そのものに取り組んでいる。東アジアやロシアにおけるこれらの史料についての組織的な取組は、日本学士院とその先人たちによって初めて行われた。史料の範囲は膨大で、様々な分野の研究者が長期間にわたって取り組むことが不可避である。本プロジェクトは1922年に開始され、第二次世界大戦による中断を経た後、1954年から67年間*にわたって継続されている。

プロジェクトの目的は模範的である。国外に所在する日本関係史料のマイクロフィルムのデータベースを構築することは、国際理解の促進に役立ち、歴史の記録に絶えることのなかった誤解を正すだろう。個人的に私は、本プロジェクトが出版したいいくつかの記録を、自身の17-18世紀の日本の対外貿易についての研究に用いたことがある。これらの記録の出版

は、多くの研究を可能にする。他にも、東アジア及びロシアには、日本の歴史に関連し、研究者にとって有用だがまだ利用されていない重要な文書が多数あると思う。

(中略)

結論として、企画も内容も優秀である。

(2013年総会記録 p.285-6) より *原文のまま、正しくは2012年までで58年となる。

史料研究では、『中院一品記』の業績5が修復と一体となった徹底した原本調査・研究を実施し、成果を展示に反映した。「蔣州咨文」は修補により価値が再発見され、重要文化財指定を受けた〔資料21-23(p.18)〕。

B 歴史情報の研究資源化と歴史情報学研究〔資料21-36〕

資料21-36 Bに関連する業績

業績	研究テーマ	内容
6	東京大学史料編纂所歴史情報処理システム (SHIPS) の高度化	各種歴史情報データベース、デジタル画像閲覧システム
7	正倉院文書の解析支援研究	正倉院文書の詳細な目録作成と正倉院文書マルチ支援データベース (SHOMUS) の構築
8	歴史情報学研究	歴史情報検索システム、工学手法を用いた史料テキスト分析

SHIPS 上に新たな DB を構築し、デジタル画像の公開を開始する等、歴史情報の研究資源化を支えるシステムの高度化に成果を上げた〔業績6、資料21-37〕。

資料21-37 第2期中期計画期間における歴史情報処理システムの機能強化 (2015年度まで)

- 1) ストレージの増強 (格納領域: 2010年 30TB → 2015年 85TB)
- 2) WEB サーバとデータベースサーバのスケラビリティ向上 (WEB サーバとデータベースサーバを分離, WEB サーバ月間アクセス件数 270 万件, データベースサーバ月間アクセス件数 22 万件に対応)
- 3) サーバ仮想化およびストレージの集中化による柔軟なコンピュータリソース配分の実現
- 4) 他機関データベースとの連携システムの実現 (連携先: 奈良文化財研究所, 京都府立総合資料館)
- 5) セキュリティ機能の強化 (サーバ証明書導入, データベースシステムにおける堅牢性の向上)
- 6) 災害対策のための遠隔地バックアップデータ配置 (配置先: 京都大学地域研究統合情報センター)
- 7) 運用コストの軽減 (クラウド利用やシステムおよびサーバ統合などにより少人数によるシステム運用を実現)

業績7は、高度の専門性を要する正倉院文書の研究を支援する DB を構築公開し、研究成果を凝集した目録を刊行した。業績8の歴史情報学研究は、史料の収集、解読、編纂という研究所の営みを、情報学的観点から理論的に補強するものとして、二つの賞を得た〔資料21-41(p.32)〕。

C 国際連携による研究の進展 [資料 21-38]

資料 21-38 Cに関連する業績		
業績	研究テーマ	内容
4	海外所在史料の収集と研究	日本学士院との連携による外国語史料の収集と『日本関係海外史料』の編纂
9	イェール大学所蔵日本関連資料の再活用による日本研究の推進	イェール大学との共同調査による所蔵日本語古文書の修理・目録化・研究・展示
10	倭寇図像の比較研究	日中の研究者による史料編纂所所蔵「倭寇図巻」と中国国家博物館の「抗倭図巻」の比較研究
11	日本関係古写真史料の基礎的研究	国内外の19世紀後半古写真の調査・保全と史料学的分析

外国語史料の収集・研究・編纂〔業績4〕に加え、イェール大学所蔵日本語史料の修補・調査・研究〔業績9〕を行い、海外所蔵史料の研究資源化に成果を上げた。倭寇図像の研究は、日中の研究者の連携により画像史料による歴史研究の可能性を示した〔業績10〕。古写真研究〔業績11〕は、国内外で多くの古写真を発見した。

D 画像センター・拠点・外部資金等による多彩な研究成果とその発信 [資料 21-39]

資料 21-39 Dに関連する業績		
業績	研究テーマ	内容
10	倭寇図像の比較研究	日中の研究者による史料編纂所所蔵「倭寇図巻」と中国国家博物館の「抗倭図巻」の比較研究
11	日本関係古写真史料の基礎的研究	国内外の19世紀後半古写真の調査・保全と史料学的分析
12	関連史料の収集による長篠合戦の立体的復元	屏風等の画像史料と文献史料を広く調査し長篠合戦の全容を研究
13	天皇家（禁裏）・公家文庫の目録学研究	アクセスの難しい天皇家・公家の文庫の総合的調査研究と目録作成
14	精密な史料解説の実践とそれに基づく先端的研究の社会的発信	啓蒙書、展示による最新の研究成果の一般向けの発信

業績10～12は画像センターのPJから拠点共同研究、外部資金による研究へと発展した〔資料21-15(pp.10-11)、-21(p.17)〕。業績12は、絵画史料等を用い長篠合戦の実像に迫る新知見を得て一般の関心にこたえ、編纂にも活用されている。拠点の共同研究ではそのほかにも、複数機関に分蔵される対馬の大名「宗家史料」の目録化と連携検索の実現が、長崎対馬歴史民俗資料館所蔵分の「対馬宗家関係資料」の重要文化財指定(2014年)につながった。

科研費〔資料21-21(p.17)〕による天皇家・公家文庫の目録学研究は、伝統的知識体系の総体を解明する研究であり、デジタル画像70万コマ以上を公開し、2015年度の研究進捗評価でAの高い評価を得ている〔業績13〕。

史料の展示、シンポジウムや講座の開催に加え、史料編纂所編の新書を刊行し好評を博している点は、文化的・社会的意義が大きい〔業績14〕。

E 異分野連携による多彩な成果

史料集編纂という日本史学の基幹に位置する成果とともに、多様な異分野との連携により、従来の日本史学の枠を超える成果を生み出している〔資料 21-40〕

業績	研究テーマ	連携分野
5	貴重史料の研究と保全	文化財保存科学 美術史 農学(料紙研究)
6	東京大学史料編纂所歴史情報処理システム (SHIPS) の高度化	情報学
7	正倉院文書の解析支援研究	情報学
8	歴史情報学研究	情報学
9	イェール大学所蔵日本関連資料の再活用による日本研究の推進	外国史
10	倭寇図像の比較研究	外国史 美術史
11	日本関係古写真史料の基礎的研究	写真化学 文化財保存科学 外国史
12	関連史料の収集による長篠合戦の立体的復元	美術史 国文学 考古学
13	天皇家(禁裏)・公家文庫の目録学研究	国文学 図書館学

そのほか、今期中に発表された業績は、資料 21-41 に示す各賞を受賞しており、若手研究者の個人研究も高く評価されている。

受賞者氏名	賞名	受賞年月	受賞対象となった研究課題名
網川 歩美(学術支援専門職員)	徳川奨励賞	2011年12月	『日本近世社会における「闇齋学」の受容』
岡 美穂子(助教)	ロドリゲス通事賞	2013年1月	『商人と宣教師：南蛮貿易の世界』(東京大学出版会刊)
山田 太造(助教)	情報処理学会山下記念研究賞	2013年7月	関連史料収集のための手法に関する考察—日本の南北朝期における史料を対象に—
宮川麻紀(特任研究員)	日本歴史学会賞	2014年7月	論文「八世紀における諸国の交易価格と估価」
山田太造, 野村 朋弘, 井上 聡(助教)	情報処理学会 人文科学とコンピュータシンポジウム「じんもんこん 2013」ポスター賞	2014年12月	トピックモデルを用いた天正期古記録『上井覚兼日記』における人物間関係の検出
芝崎 有里子(学術支援専門職員)	解釈学会賞	2015年8月	「しれもの」面白の駒をめぐる：『落窪物語』における文人作者的な要素
彭浩(外国人研究員、特任研究員)	日経・経済図書文化賞	2015年11月	『近世日清通商関係史』(東京大学出版会刊)
近藤成一(教授) (イェール大学 Daniel V. Botsman 他との共編)	2016 Katharine Kyes Leab and Daniel J. Leab “American Book Prices Current” Exhibition Award	2016年1月	Treasures from Japan in the Yale University Library (exhibition catalog)

(水準) 期待される水準を上回る。

(判断理由)

①A群は、広範な史料調査と厳密な史料研究に基づく基幹史料集の刊行であり、国際的にも高い評価を受けている。学術発展のためには、史料集刊行及びデータベースの安定的維持が重要であり、文化の基盤形成としても意義が大きい。

②B群は、歴史情報処理システムを高度化し、蓄積した歴史情報を研究資源として公開することで日本史研究、市民の歴史認識の基盤強化に貢献している。

③C群は第2期に拡大した国際交流事業〔資料21-17(p.12)〕を中心に、外国語史料、海外所在史料の収集〔資料21-19(p.15)〕、調査研究において、日本史学の国際的拠点として海外からも注目される成果を上げた。

④D群は、倭寇図像・長篠合戦図・古写真等の画像史料、日本文化の根幹に関わる天皇家・公家文庫等について第2期に新知見を提示し、学術の発展に寄与し、社会への学問的知識の普及に貢献した。

⑤E群は、理系を含む多様な異分野との連携による研究成果であり、第2期より本格化した情報学との連携をはじめとして、従来の日本史研究では果たせなかった数々の新発見があった〔資料21-40(p.32)〕。

⑥第2期における研究成果は、学界・社会に大きなインパクトを与え、若手研究者を含めて、多くの受賞を果たした〔資料21-41(p.32)〕。

研究所の使命である継続的成果と第2期の新たな成果において、関係者から期待される水準を上回ると判断する。

Ⅲ 「質の向上度」の分析

(1) 分析項目Ⅰ 研究活動の状況

2010年度に拠点としての活動を開始した。6年間に計73件の共同研究を行い(資料21-29(pp.24-25))、活発に活動したことで、地域の研究者との連携が強化され、調査件数が増加し、デジタル画像収集にも寄与した。多様な研究が展開され、基幹的史料集の編纂にも生かされるなど、重要な質の向上があったと判断できる。

また、デジタル媒体での歴史情報公開を開始した〔資料21-9、10(p.7)〕。所蔵史料のデジタル化(約36万コマ)及びデジタル撮影による史料収集(約36万コマ)をすすめ、画像の統一的管理のシステムを構築運用しており、研究資料提供機能において重要な質の向上があったと判断できる。

(2) 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

編纂事業を着実に進展させる〔業績1～4〕と共に、海外の諸機関・研究者との共同研究を拡大し〔資料21-17、18(pp.12-14)〕、ロシア所在史料、イェール大学所蔵史料、倭寇画像、古写真等の研究に顕著な成果をあげた〔業績3、9～11〕。美術史、文学等隣接分野、さらに情報学地震学等理系分野との連携〔資料21-41(p.32)〕により、従来の日本史学の枠を超えた成果〔業績5～13〕を生み出しており、国際連携、異分野連携による成果において、重要な質の向上があったと判断できる。